

1972 - 2022

感謝のカタチ
tvk 50th

tvk(テレビ神奈川)は
2022年4月に開局50周年を迎えました

感謝のカタチは色々。tvkを愛する全ての皆さんに、
ありったけの「感謝のカタチ」をお届けします！



tvk開局50周年
特設サイト



人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。
JAPAN
PHILHARMONIC
ORCHESTRA
——創立指揮者 渡邊 暁雄——

日本フィルハーモニー交響楽団
JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

第384回

横浜定期演奏会

384th YOKOHAMA Subscription Concert

2023年1月28日(土) 午後5時開演

横浜みなとみらいホール

5:00pm January 28th (Sat.), 2023, at Yokohama Minato Mirai Hall



主催：公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団
後援：神奈川新聞、**tvk**、シンガポール共和国大使館
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会





朝日カルチャーセンター横浜教室 講座レポート

今シーズンより、横浜定期演奏会で取り上げる作品をテーマに、横浜国立大学教授小宮正安氏を講師に迎え、その歴史や聴きどころを実演も交えてレクチャーする講座が開催されています。昨年9月と10月に開催された講座の様子をレポートします。

9月17日 「社会文化史から読み解く「受難」と「舞踏」のシンフォニー」

講座第1回目は、9月のチャイコフスキー：交響曲第6番《悲愴》と10月のベートーヴェン：交響曲第7番が題材です。「交響曲」「オーケストラ」の成り立ち、ベートーヴェンの偉業を当時の史実からも読み解き、また“Pathétique 悲愴”に秘められた宗教的な意味・当時の社会不安からチャイコフスキーの想いまで感じることができました。

講座の後半は、日本フィル団員の演奏も交えながら各作品を学びます。

元ヴィオラ首席奏者の後藤朋俊（常務理事）は、「ベートーヴェンの4楽章の主題は、ヴィオラは労働ですね！裏拍のアクセントはダンスを進ませる役目があります。ヴィオラはサンドイッチでいうと中身。パンはそれだけでも美味しいけれど、中身があることによってよりおいしくなる」「チャイコフスキーでは、場面の転換を納め、橋渡しする役割があり、これはヴィオラしかできないだろうと思っている」などヴィオラの視点から楽曲を紐解きました。



10月10日 「社会文化史から読み解く「芸術家の憧れ」の交響楽」



この回は11月のチャイコフスキー《くるみ割り人形》と本日演奏するラフマニノフを題材に。前半の講義ではロシアが繁栄しながらも光と影の時代であったことから、可愛い《くるみ割り人形》の中にも自分の世界に入り込む様子が、仄暗い《悲愴》との関連からも見られることや、ラフマニノフの時代になるとロシアの政情はもっと悪化し、物悲しい

とされるホ短調を採用し、「怒りの日」を取り入れるなど、ラフマニノフ自身を取り巻く世界が崩れ、一筋縄ではいかない人生を語っていることなどを学びました。

後半はラフマニノフの交響曲第2番で大活躍するクラリネットから照沼夢輝が参加。第3楽章のソロは入団試験で吹くことや、実際の演奏中には2楽章の速いテンポから頭を切り替えるのが大変だ、と教えてくれました。また、ソロ終わった後もメロディーを引き立たせるために色彩をつけていくことが求められ、ラフマニノフはオケに要求するものが高いく、と語りました。



次回の講座は6月定期と7月定期の内容を中心に開催予定です！

「一時代の終焉 一時代の始まり」

オール・ラフマニノフ・プログラム。しかも作曲はもとより、ピアノに指揮に才能を発揮した彼の魅力が凝縮された2曲である。さらに言えばこれらの作品には、懐かしい19世紀を振り返りながらも、怒涛の20世紀に生き、ついには祖国をも失うこととなるラフマニノフの動乱の人生が予告されている。そんな「一時代の終焉 一時代の始まり」を、日本フィルの次期首席指揮者となるウォンの鮮烈な解釈と小菅のピアノ独奏で体験しよう。

Programs

ラフマニノフ：

ピアノ協奏曲第3番 二短調 op.30 (約39分)

Sergei RACHMANINOV:

Concerto for Piano and Orchestra No.3 in D-minor, op.30

——— 休憩 (15分) Intermission ———

ラフマニノフ：

交響曲第2番 ホ短調 op.27 (約60分)

Sergei RACHMANINOV: Symphony No.2 in E-minor, op.27

指揮：カーチュン・ウォン

[首席客演指揮者(次期首席指揮者)]

Conductor: Kahchun WONG, Principal Guest Conductor

ピアノ：小菅 優

Piano: KOSUGE Yu

コンサートマスター：扇谷泰朋 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: OGITANI Yasutomo, JPO Solo Concertmaster

ソロ・チェロ：菊地知也 [日本フィル・ソロ・チェロ]

Solo Violoncello: KIKUCHI Tomoya, JPO Solo Violoncello

指揮：カーチュン・ウォン

[首席客演指揮者(次期首席指揮者)]

ミュージカル・アメリカ誌で「その音楽性の深さと誠実さ」と評されるシンガポール出身のカーチュン・ウォンは、2016年グスタフ・マーラー国際指揮者コンクールで優勝、その名を世界に知られることとなる。2022年8月までニュルンベルク交響楽団首席指揮者を務め、これまでに、ニューヨーク・フィルハーモニック、ロサンゼルス・フィルハーモニック、クリーヴランド管弦楽団、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団を含む国内外の主要楽団との共演も果たす。

2016/2017年にロサンゼルス・フィルハーモニック ドゥダメル・フェローシップ・プログラムを拝命。また、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学にてオーケストラ/オペラ指揮の音楽修士号を取得。

2019年、33歳という若さでシンガポールとドイツの文化交流並びにドイツ音楽文化の海外普及における献身的な取り組みと顕著な功績により、シンガポール出身の芸術家として初めてドイツ連邦大統領より功労勲章を与えられた。

2021年12月の日本フィルハーモニー交響楽団定期公演で演奏された『マーラー 交響曲第5番』のライブ録音CDが日本コロムビアよりリリースされている。

2021年9月より日本フィルハーモニー交響楽団首席客演指揮者を務め、2023年9月には同楽団首席指揮者に就任。

感染防止にご協力をお願いいたします

●スタッフは不織布マスクを正しく着用します。また、小声で対応させていただきます。●入場時の手指消毒、手洗い、検温をお願いいたします。●ホール内ではマスク(不織布など効果の確かなもの)を正しく着用し、周囲のお客様への配慮をお願いいたします。●開演前はなるべくお席でお過ごしください。また時差退場のご協力をお願いいたします。●会場ロビーでの食事はお控えください。(ホール内は飲食禁止です)●ブラボー等の掛け声はお控えください。ホール内では大声での会話を避けるようご協力をお願いいたします。●出演者へのプレゼント(お手紙・お花などを含む)、面会、楽屋入り待ち、出待ち等はご遠慮ください。●万が一感染者が発生した場合など、必要に応じて保健所等の公的機関へお客様のお名前と連絡先を提供する可能性がございます。

この演奏会では、目の不自由なお客様のために点字プログラムをご用意しております。ご要望の方は主催受付までお申し出ください。



ピアノ：小菅 優

9歳より演奏活動を開始し、2005年カーネギーホールで、翌06年には、ザルツブルク音楽祭でそれぞれリサイタル・デビュー。ドミトリエフ、デュトワ、小澤、ノリントン、オラモ、ノット等の指揮でベルリン響、フランクフルト放送響、シュトゥットガルト放送響、BBC響、NDRエルプフィル、サンクトペテルブルク響、フィンランド放送響、フランス放送響、スイスロマンダ管等と共演。2010年ザルツブルク音楽祭で、ポゴレリッチの代役としてヘレヴェッヘ指揮カメラータ・ザルツブルクと共演。2010年から5年間、東京、大阪でベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会(全8回)を行った。さらに現在はソロだけでなく室内楽や歌曲伴奏を含む、ベートーヴェンのすべてのピアノ付き作品を徐々に取り上げる企画「ベートーヴェン詣」に取り組んでいる。録音は、ソニーから発売している『ライオン・ウィグルスワース指揮BBC交響楽団』をはじめ数多い。第13回新日鉄音楽賞、第17回出光音楽賞などを受賞。2014年に第64回芸術選奨音楽部門 文部科学大臣新人賞、2017年第48回サントリー音楽賞受賞。2017年から4年にわたり、4つの元素「水・火・風・大地」をテーマにしたリサイタル・シリーズ『Four Elements』を開催し好評を博した。



今日のコンサートの聴きどころは？
ヨーロッパ文化史研究家小宮正安さんの
面白解説をお楽しみください！

16時20分
より
大ホール内
にて♪



小宮正安(こみや まさやす) ●ヨーロッパ文化史・ドイツ文学研究家。横浜国立大学(大学院都市イノベーション学府・都市科学部)教授。著書に『コンスタンツェ・モーツァルト〈悪妻〉伝説の虚実』(講談社選書メチエ)、『名曲誕生 時代が生んだクラシック音楽』(山川出版社)、『音楽史 影の仕掛人』『オーケストラの文明史 ヨーロッパ3000年の夢』(春秋社)、『モーツァルトを「造った」男 ケッヘルと同時代のウィーン』(講談社現代新書)、『愉悦の蒐集 ヴンダーカンマーの謎』(集英社新書)など多数。『ウィーンフィル・ニューイヤーコンサート』でのコメンテーターをはじめテレビやラジオへの出演、『東京・春・音楽祭』でのナビゲーターなど、幅広い分野で活躍している。

お客様へのお願い

演奏中は手持ちの時計のアラーム、または携帯電話などの電源はお切りください。手荷物、傘、チラシ類などの物音、話し声などで他のお客様のご迷惑にならないようご配慮をお願い申し上げます。尚、録音、録画、演奏中の写真撮影は固くお断りしております。

～セルゲイ・ラフマニノフ 生誕 150 周年～

チャイコフスキー(1840-93)が築き上げたロシアのロマン派音楽。その後継者といえるのが、稀代のピアニストであり、作曲家のセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)である。西ヨーロッパの音楽様式の中に、ロシア民謡やロシア正教会聖歌などの影響もうかがえる、甘美で息の長い、そして壮大な旋律を盛り込んだ楽曲を数多く作り上げた。20世紀になって様々な「現代音楽」が模索されるようになる中、19世紀の香りを濃厚に宿した「最期のロマン派」ともいえるその作風は、今も熱狂的に支持されている。

ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 op.30

ラフマニノフにとって3番目のピアノ協奏曲となるこの作品は、彼がドレスデンに滞在中の1907年に着手された。この時期は、本日の後半に演奏される『交響曲第2番』をはじめ、『ピアノ・ソナタ第1番』、『交響詩《死の島》』などの代表作が生みだされていた頃。20歳台には「作曲家失格」というレッテルさえ貼られ、失意のどん底にあったラフマニノフだが、そうした挫折を乗り越え、創作力も頂点に達していた。

ただしこの協奏曲は、ドレスデンでは完成されなかった。1908年、彼はロシアに帰国するがそこでも脱稿されることはなく、ついには翌1909年のアメリカ・カナダの演奏旅行まで持ち越された末、ようやく書き上げられたのだった。

これほどまでに、この作品が慎重に書き進められた理由はどこにあるのだろう。まず、ピアノ独奏やオーケストレーションの華やかさという点では、1901年に完成された『ピアノ協奏曲第2番』のスタイルを踏襲。超絶技巧を散りばめた独奏ピアノが、交響曲のような壮麗さを具えたオーケストラと濃厚に絡み合う。名ピアニストとして鳴らしたラフマニノフが、自らの演奏技術の限界にまで挑んだかのような内容であり、彼の登場を心待ちにしていた聴衆をうならせるに十分な効果を具えていた。

と同時に、単なるこけおどしではない音楽的な充実が「第2番」以上に深まっているのもたしかである。作品の隅々まで配慮の行き届いた語り口は、演奏家であると同時に作曲家でもあったラフマニノフが、自らの手によって望んだ最高の表現に他ならない。つまりこの協奏曲では、超絶的なテクニックと繊細な音楽性のバランスが、きわめて絶妙に保たれている。まただからこそ聴き手も、独奏ピアノの華やかさに酔うもよし、心のひだに分け入るかのような充実した内容を噛みしめるもよし、という多様な楽しみ方ができる。

なお初演は、この作品が完成した年の11月28日に、ラフマニノフ自身の独奏とニューヨーク交響楽団(ダムロッシュ指揮)により行われた。

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント、ニ短調、4分の4拍子、自由なソナタ形式

第2楽章：間奏曲 アダージョ、イ長調、4分の3拍子、変奏曲形式による三部形式

第3楽章：フィナーレ アラ・プレーヴェ、ニ短調、2分の2拍子、ソナタ形式

楽器編成 独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、弦楽5部。

交響曲第2番 ホ短調 op.27

若かりしラフマニノフが作曲した『交響曲第1番』(1895)の初演は、演奏のひどさや西洋派と軋轢を残す国民楽派からの批判を浴びたこともあり、記録的な大失敗に終わる。この失敗はラフマニノフに深刻な後遺症をもたらした。「作曲家不適合」のレッテルを貼られ、自信を失ってしまった彼にとって、次の交響曲を書くことは途方もなく重い仕事となる。

その後ラフマニノフは、適切な治療、指揮者としての活躍、『ピアノ協奏曲第2番』の成功、1902年の結婚などによって立ち直ってゆく。それでも1906年から翌年春にかけて、彼がドレスデンで『交響曲第2番』を書いていたことは、ロシアの新聞がその一報を伝えるまで、友人たちでさえ知らなかった。

初演は1908年1月26日、かの『交響曲第1番』の初演が大失敗した地サンクトペテルブルクでジロティ指揮により、さらに2月2日(ともにロシア暦)にモスクワで作曲者の指揮によって行われ、満場の喝采を博した。19世紀前半にベートーヴェンによって確立された交響曲の構造に則り、「闇から光へ」という展開をたどるが、大きな苦悩を経験したからこそ生み出されたであろう美しくはかない旋律は、聴く人の心を慰め、奮い立たせる。

第1楽章の序奏部には、全体を通じて重要な役割を持つ多くの動機が書き込まれている。暗く陰鬱な響き(その骨格を成すのは、中世のカトリック教会で葬儀の際に用いられたグレゴリオ聖歌「怒りの日」の旋律である)はラフマニノフが味わった苦悩だろうか。続いて主部に入ると、ラフマニノフならではの劇的で甘美な2つの主題があらわれる。主題が変化する中、序奏部で提示された動機も顔を覗かせ、劇的に展開されていく。

第2楽章は、ラフマニノフの原風景ともいえるロシア風の音楽が凝縮されている。その疾風怒濤とは対照的なのが第3楽章だが、夢と憧れに満ちたクラリネットの独奏も、元をたどれば第1楽章の序奏部の、苦悩を彷彿させる動機から編まれている。第4楽章は、イタリアの民族舞踊「タランテラ」のリズムに基づく、2つの主題をもつ祝祭的なフィナーレ。これまでの動機も回想されるが、生命力に満ちた響きが豊かに溢れ、様々な懊悩や悲哀が輝かしい光の中に昇華されてゆくかのようだ。

第1楽章：ラルゴ〜アレグロ・モデラート、ホ短調、4分の4拍子〜2分の2拍子、序奏付のソナタ形式

第2楽章：アレグロ・モルト、イ短調、2分の2拍子、スケルツォ楽章

第3楽章：アダージョ、イ長調、4分の4拍子、三部形式

第4楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ、ホ長調、2分の2拍子、ソナタ形式

楽器編成 フルート3(ピッコロ持替1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、弦楽5部。



Column

歴史でひもとく! ~クラシックこぼれ話 by 小宮正安



ドレスデンから祖国へ…

曲目解説にも記されている通り、本日演奏される『ピアノ協奏曲第3番』と『交響曲第2番』を作曲していた1907年、ラフマニノフはドレスデンにいた。ロシア出身の彼が、なぜドイツ東部の街に? とも思いたくなるが、当時の彼は故郷ロシアを片方の軸足に、もう片方の足を欧米の各地に広げつつあった。西洋音楽の伝統が息づくドレスデンも、その1つの地だったということ。

なぜかといえば、ラフマニノフは名にし負うピアニストであり、さらにこの頃になると、指揮者、作曲家としても有名になっていたためである。つまり、各地から引っ張りだこのスター音楽家であって、そうなるとロシアよりもヨーロッパの真ん中に住んでいた方が、移動もしやすかった。

だがこれはあくまで、実質的な問題にすぎない。何しろ当時のロシアは、やがて1917年のロシア革命にも通じるような矛盾が次々と露呈され、政治状況もきわめて不安定だった。皇帝が暗殺されたり、労働者たちのデモが軍隊によって鎮圧されたり…。一見華やかで安定しているような帝政期のロシアも、一皮めくれば危うさに満ち満ちていた。

そんな現実を、人一倍繊細な感覚を具えていたラフマニノフが気付かぬわけがない。彼は、生まれ育ったロシアの文化や風土と自分が切っても切り離せぬ存在であることを知りながらも、だからこそ危機に立つ祖国から距離をとる。そしてあえて異国の地に身をおきながら、自らの故郷に疼くような想いを寄せてゆく。

となると、ラフマニノフが特に『交響曲第2番』の随処に、中世のカトリック教会で葬儀の際に歌われていたグレゴリオ聖歌「怒りの日」の旋律を忍ばせた理由もよく分かる(『ピアノ協奏曲第3番』にも、実はこの動機は隠し玉のように用いられているのだが)。「怒りの日」の歌詞は、世界の破滅を扱ったもの。つまり、まだそこまで顕在化しているわけではないものの、ラフマニノフにとって懐かしい祖国の終焉は、確実に近づきつつあった。

実際ロシア革命がおり、ロシア帝国が滅んだ後、ラフマニノフは2度とこの地へ戻ることはなかった。そしてしばらくの間は、あれほどまでに力を注いでいたはずの作曲活動もおこなえないほどのスランプに陥ってしまった。



1900年頃のドレスデン。画面左奥には、ゼンパー・オーバー(ドレスデンの州立歌劇場)が見える。

Next YOKOHAMA

第385回横浜定期演奏会 ~音楽が自然を求める時…~

2023年3月11日(土) 17:00 横浜みなとみらいホール

指揮: 藤岡幸夫

サクソフォン: 須川展也

菅野祐悟:

サクソフォン協奏曲《Mystic Forest》

チャイコフスキー:

交響曲第4番 へ短調 op.36

© Shin Yamagishi

16:20からの
オーケストラガイドは
藤岡マエストロが
登場!



藤岡幸夫



須川展也

S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C ¥5,000 P ¥4,000 Ys (25歳以下) ¥1,500

※ Ys席はS席以外から選べます。

※ 車いすおよび障害者手帳をお持ちの方は、サービスセンターへお問い合わせください。

好評発売中!

第750回 東京定期演奏会

2023年5月12日(金) 19:00 / 2023年5月13日(土) 14:00

サントリーホール

指揮: カーチュン・ウォン [首席客演指揮者(次期首席指揮者)]

チェロ: 佐藤晴真

ミャスコフスキー: 交響曲第21番《交響幻想曲》嬰へ短調 op.51

芥川也寸志: チェロとオーケストラのための《コンチェルト・オスティナート》

ヤナーチェク: シンフォニエッタ

© Tomoko Hidaki



佐藤晴真

© Angie Kremer



カーチュン・ウォン

カーチュンと世界各地の音楽的アイデンティティを探る旅

シンガポールと日本。共にクラシック音楽の「本場」出身ではない指揮者とオーケストラだからこそ持ち得る視点で組まれたのが今回のプログラムです。中央ヨーロッパからは一定の距離を置いたミャスコフスキー(ロシア)、芥川(日本)、ヤナーチェク(チェコ)というユニークな作曲家たちが、オーケストラという典型的な西洋音楽のメディア(媒体)を通じて、自身の民族性・時代性を存分に披露してくれます。それぞれの「クセが強い」音楽を、カーチュンならではの解釈で時には土臭く、時には洗練さをもって皆様にお届けいたします。芥川作品へのソリストにはきわめて難関で知られるミュンヘン国際音楽コンクールで日本人として初めて優勝した若きチェリスト佐藤晴真を迎えます。

